



八幡山から近江八幡市街を望む。



旧八幡郵便局（修復後）



長年、ヴォーリス建築修復の市民活動を行っている石井和浩氏（旧八幡郵便局にて）

明治三十八年に、滋賀県近江八幡に米
国からキリスト教伝道のために来日した
二十四歳の青年ウィリアム・メレル・ヴ
ォーリス。
生涯をこの地で過ごし、関西を中心に
国内外で一五〇〇棟を超える建築を設計
した。ヒューマニズム溢れる建築思想は
大阪心齋橋大丸百貨店、東京・山の上ホ
テルをはじめ教会、学校、病院、住宅な
どに近代建築の根底に潜む源流となった。
一方で学校教育、医療、建築、出版な
どの分野で多彩な才能を発揮した。伝道
活動の一環としてYMCA関連施設や結
核診療所、図書館などの建設を進め、自
ら運営し、神の国づくりを目指した。
『建物の品格は人間の人格の如く、その
外観よりもむしろその内容にある』とい

う信念で設計活動に取り組み、それが後
年、「室内の隅々に埃がたまらないよう
に床や天井の隅にも丸みをつけ、階段の
段差を緩やかにする」など、人に優しい
ヴォーリス建築の特徴を生み出すことに
もなった。
さらにヴォーリスは、自身が日本の生
活体験の中から培った町の歴史・文化・
気候・風土などの体感を元に、100年
先のまちなあるべき姿を見据えた人間ら
しい心豊かな生き方を建築を通して人々
に感化していた。
また、日本の伝統的なハレの空間を中
心とした間取りではなく、日本の従来の
「民家にはなかった」居間を日当たりの良
い南側に設け、居住者の生活を重視した
間取りへと改善する必要がある。それは、

健康で能率的な暮らしの中に均衡に保つ
た造形美が人間の美しさや健全なる精神
が育つと考えていた。日本の文化の発展
を願って生活改善運動者として実践して
いたものである。
人間は平等に幸福である普遍性を願う、
どの時代にもヴォーリス建築は日本はも
とより海外へも建物を通して幸福で楽し
く生きる人間形成と社会の基盤としての
器を築いたのである。



一柳米来留
William Merrell Vories
(1880—1964)